
短編小説 花火

くりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編小説 花火

【Nコード】

N3158V

【作者名】

くりこ

【あらすじ】

花火を題材にしたショート作品です。保育士ミナが園児に見せた花火は…
後味ほのぼのしていただけたら嬉しいです。

他サイトにて掲載していた作品を転載しています。

登園時の慌ただしさも一段落した、いつもの朝。

保育士のミナは、着席した園児達へ「じゃあ今日はお絵描きをしましょうネ」と声を張った。

昨夜は地元で花火大会があつた。

特に課題は決めなかったが、子供たちにはまだ鮮やかな残像があるらしい。

小さな画家達は色とりどりのクレヨンを握り締め、白くて四角い夜空へめいめい花火を打ち上げる。

室内を見回っていたミナは、伶クンの画用紙を目にするや否や足が止まる。

伶クンはなんとキャンバスを真っ黒に塗りつぶしていたのだ。

ギョツとしたミナは膝を折り、険しい顔の小さな彼を覗く。

思いあたる節もあるから、オブライトに包み遠回しに尋ねた。

「伶クン。何の絵を書いてるの？　もしかして、まさかの……海苔？」

ミナをつまらないジョークなど無視し、伶クンはムスっとしたまま口をとがらせる。

「父ちゃん仕事で、連れて行ってくれなかったもん！　花火、ベラ
ンダから見えなかったもん！」

今にも泣き出しそうな彼に、ミナの胸は塞がる。

伶クンの家は父子家庭だ。

いつも閉園時間ギリギリで駆け込む、額に汗したスーッ姿の父親が
目に浮かぶ。

ミナは伶クンの頭を優しく撫ぜた。

「よしっ！　じゃあ代わりに先生が、伶クンのお空へ花火を上げて
もいい？」

伶クンがキョトンと見上げる。ミナはニッコリと笑って見せた。

「ヒュウー、ドッパーンッ！」

効果音を演出しつつ。

ミナの手により、漆黒の闇夜に、極彩色の火花が舞う。

ピンクや黄色の色水が点々とちりばめられると、まるでそれは花火のように見えた。

にわか花火師が、夜空に見立てた紙へ向って絵の具を含ませた筆をしごく。飛沫はまるで、スターマインのような花を次々に咲かせていった。

伶クンが目を輝かせて歓声をあげた。

迎えに来た伶クンの父親が、息子から経緯を聞き、恐縮しつつミナへ絵の礼を言う。

「なんか、ありがとうございました。最近仕事がたてこんで……中々コイツのことを構ってやれずに……」

花火の絵を大事そうに抱えた伶クンが、ふいにとある告げ口をミナへする。

「父ちゃんねえ。本当はミナ先生と花火行きたいって言ってたんだよ。先生のこと可愛いーって、いつも父ちゃ……」

「わあーっ！　こらこら、伶っ！」

慌てて息子の口をふさぐ父親。しかし手を振りほどいた伶クンは父へ叫んだ。

「でも、父ちゃん駄目だよ！　ミナ先生はボクのお嫁さんになるんだもん！　ボクのほうがずっとずっと、先生のこと好きなんだっ！」

親子喧嘩を始めた二人へ、ミナは思わず吹き出す。

花火大会はシーズンたけなわだ。来週は隣り街でも開催される。

三人で見上げるだろう夜空を想う。ミナはそこへ、キラキラと輝

く花々を描いていた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3158v/>

短編小説 花火

2011年10月8日19時13分発行